

にこり

ながさき

ようこそ、笑顔咲く長崎県へ

Nagasaki Discovery Magazine ni-ko-ri

長崎県



おもてなしの島

小値賀へ

Ojiko Islands

No.
10

「普段」を贈る、
「特別」を選ぶ。
あの方に
届けたい
ふるさと自慢。



美しい自然と豊かな歴史に育まれ、
私たちの暮らしに根付いたふるさとの品々。
いつも身近にあるものだから、普段、味わっているものだから安心、納得。
今年は「普段」に「特別」な思いを込めて、
お歳暮は長崎県産品。

長崎県物産館
冬のギフトコーナー

多数のお歳暮・お年賀対応品を取り揃えて皆様のご来店をお待ちしております。

営業時間 9:00～18:00 休 日 12月29日(木)～1月3日(火)
場 所 長崎市大浦町2番1号(旧市庁舎1階) 問い合わせ TEL.095-821-8580
メー ル bussan@nagasaki.jp 年ギフトカタログは無料で請求できます。

12月24日(土)まで 年内お届けは、12月20日(火)まで受け付け分までとさせていただきます。



ネットで長崎名物をお取り寄せ!

詳しくはWebで

いいながさき

(社)長崎県物産振興協会

にこり

表紙のはなし 落花生
小値賀町を代表する特産品の一つ。町では、
豆を炒って、焼いて、食べて、「ギョーモン(元気)」
な町づくりを目指す「マメな島の豆プロジェクト」
を展開中である。

平成29年11月発行
編集・発行/長崎県広報課 〒850-8570 長崎市江戸町2-13
電話095-855-2021 メール:ni-ko-ri@pref.nagasaki.lg.jp
デザイン/「有」イースワークス 印刷/「株」インテックス
http://www.pref.nagasaki.jp/koho/piazza/dream/

定価無料(無料)
の申込は
こちらから

長崎県





世界が感動した おもてなしの島

ふるさと再発見 | Ojika Islands

■下校時刻、子どもたちが「こんにちは」と元気に挨拶してくれました。■島民の生活には欠かせないのが、島民の生活でいただく島ごはんは忘れられない思い出に。■島の途中でお会いしたおばあちゃんたち。島は静かな出会いにあふれている。■島民の生活でいただく島ごはんは忘れられない思い出に。■島の途中でお会いしたおばあちゃんたち。島は静かな出会いにあふれている。■島民の生活でいただく島ごはんは忘れられない思い出に。■島の途中でお会いしたおばあちゃんたち。島は静かな出会いにあふれている。

小値賀には
壮大な歴史が
流れている

五

島列島の北端に位置する小値賀町は、大小十七の島々からなる。そのうち人が住んでいるのは小値賀島、斑島、黒島、大島、納島、六島、野崎島の七つの島で、人口はわずか二千九百人ほどである。

小値賀の島々はその昔、火山の噴火によって形成されたという。そのため、小値賀の大地はミネラル豊富な赤土で、島に豊かな恵みをもたらしてきた。太古よりこの地に暮らす人々の命は、島を囲む海と、肥沃な大地に守られてきたのである。

小値賀島の東には、江戸時代に捕鯨や酒造りで富を築いた藤松家がある。旧家の屋敷は現在レストランに生まれ変わっているが、専用の船着き場はそのままの佇まいで残っており、当時の面影を偲ぼせる。また、近年この辺りの海底では、平安時代末から鎌倉時代初期に船から落ちたと思われる中国陶磁器が見つかった。これは、かつて小値賀島が国際貿易港として繁栄していたことを示す証である。それぞれの時代で繁栄を築いた小値賀。その島が近年、再び脚光を浴びている。国内はもちろん、世界中から人々が訪れているのだ。限られた交通手段しかないこの島に、人々は何度も何度も足を運ぶ。人々を魅了してやまないのは、島人たちのおもてなしの心だという。今回はそんな温かな魅力にあふれる小値賀を旅する。



内を走っていると、鮮やかな赤土の美しい畑や田んぼが次々に目に飛び込んでくる。道端には見慣れないものが干してある。どうやらゴマらしい。株ごと刈り取ったゴマを天日に干して乾燥させ、時期が来たら叩いてはじけた実を取り出すそうだ。

柳地区の集落に入ると、一年前に福岡から小値賀に移住したという嶋立さんが「初めて見たとき、とても驚きました」と、住民センター前の電話ボックスを指さした。近付いてみると、中には公衆電話ではなく、何やら機械が置かれている。「柳地区ではここから町内放送をするんですよ」と嶋立さん。「僕の隣の地区では町内放送の前には必ず演歌が一曲流れます」と嶋立さんが笑う。なんとほのぼのとした話である。

柳地区には「五両だき」という名勝がある。「だき」とは、波によって浸食された地形のこと。ここには幾万年の海蝕によってできた大きな「だき」があり、自然の力に圧倒される。五両だきの前に広がるのは透明度の高い遠浅の海。周辺に展開される長崎島と呼ばれる岬や白い砂浜は、まるで一枚の絵のようだ。澄んだ空気に、何度も深呼吸をした。

佐世保港から高速船に揺られること一時間半、小値賀島に到着した。島特有ののんびりとした空気が流れる港である。出迎えてくれたのは、小値賀町役場の神崎健司さんと、「おちかアイランドツーリズム」の嶋立久人さん。

なだらかな地形の小値賀を観光するには自転車が一番と聞いて、ターミナルでレンタサイクルを申し込んだ。まず向かったのは、日本名松百選にも選ばれたという島の名所「姫の松原」。真っ直ぐにのびた一本道の両側に、空を覆うように松の木がそびえ立っている。まさに松のトンネルである。約四百五十メートルに渡って植えられた松の木は、一六七五年に植林されたものだという。松並木の中を自転車でゆっくと進んでいると、風に乘って建物からリコーダーの懐かしい音色が聞こえてきた。「僕が通った中学校なんです」と神崎さん。毎日こんなに素敵な通学路を歩けるのも、小値賀の子どもの特権だろう。

松原を抜けると、目の前に海が見えてきた。その先に見えるのが納島と宇久島だという。島

島の風に吹かれて

スローサイクリングで
ぐらりと島をめぐる





心も走りだす



緑にはひとつひとつ
匂いがある。
島がそれを教えてくれた

ポットホールは島居の先にあるという。岩場に上り、下を覗き込みながら「これがポットホールですよ」と神崎さんが教えてくれた。円形の深い穴の中にまん丸の石が転がっている。その玉は一瞬作り物かと思うほどきれいな丸で、ラムネの瓶を彷彿させる。ポットホールは、岩の裂け目から入る荒波で玉石が回転し、玉石がどんどん穴を削ると同時に、自身も丸くなりながら奥深く移動したもののこと。初めはただの岩だったものが、約六千年の年月をかけて東シナ海の荒波に磨かれ、現在の形になったのだといわれている。奇跡のようなこのポットホールは国の天然記念物に指定されており、地元の人からは「玉石様」と呼ばれ、信仰されているようだ。島を走っていると、風がいろんな緑の匂いを運んでくる。道を曲がるたびに、景色が変わるたびに、ちよつとずつ違う緑の匂いがする。「僕は島そのものに育ってもらったような気がします」と話す神崎さん。この島を包む空気に触れて、その思いがちよつとだけ分かったような気がした。

小 佐賀本島から橋を渡って行けるという斑島を目指す。坂のまち長崎に住む者にとって小佐賀はとてなだらかに感じる。「島で一番高い山でも百十一・三メートルなんです」と嶋立さん。確かに土地は開けており、どこを走っても視界がいい。斑島へ渡る橋の手前で草を食む牛に出会った。小佐賀は畜産も盛んで、ほとんどの牛が放牧で飼養されている。よく見れば子牛ばかり。潮風を含んだミネラル分たっぷりの草を食べて育った牛たちは、この島を巣立つと有名ブランド牛になるという。潮風が吹きつける真っ白なアイチ型の斑大橋は最高のサイクリングロード。キラキラと輝く海面を眺めながら、島へと渡る期待感に胸が膨らむ。橋を渡ると「ポットホール」まで千五百メートルの標識が現れた。何やら分からずに自転車を走らせると、海を望む広大な原っぱに白い小さな島居が立っており、「玉石大明神」とある。



ポットと小さな島居のあふ風景は神話の世界



ポットホール「玉石様」



「ガイドしてくれた
嶋立久人さん(左)と神崎健司さん(右)」



島内ではいたるところで
こんな素敵な小池に出会う



おいしい野菜は
島の土によって育まれる



特の浜海水浴場は汗流にもさらす透明度



港のすぐそばで開かれる「あい菜市」という名の朝市。どのお年寄りも元気いっぱいである



食

働いて、 雨ならお茶会

早起きは三文の得
島人たちの
営みにふれた朝

島

の朝は早い。朝焼けが港を照らす六時過ぎ、どこからともなく、島で「ビヨビヨ」と呼ばれる電動カートに乗ったおばあちゃんたちが小値賀港近くの小さな小屋に集まって来た。週に三回開かれる朝市である。覗いてみると、じゃがいもやかぼちゃ、白菜にねぎ、ナスにニンニクと数え切れないほどの新鮮な野菜が並んでいる。おばあちゃんたちは自分で育てた野菜をカートから下ろすと、これが楽しみといわんばかりに、ベンチに座っておしゃべりを始めた。歳を聞けば、「私は七十七」「私は八十」と皆、ニコニコ

と答える。元気の秘訣を尋ねると、「潮風やろう」「身体は動かすことやろうね」「隣近所、みんな仲良しで助け合えん」と言う。伝票整理をしていた八十一歳のおばあちゃんは、「食べて働いて、雨なら近所の友だちと家でお茶会」と嬉しそうに笑った。

港周辺には島の中心である笛吹地区が広がっている。散策しようと思えば、小値賀町歴史民俗資料館を訪れた。ここには小値賀の歴史が時代ごとに展示されている。驚くのは、古墳あり、朝鮮半島や中国との交流あり、捕鯨あり、キリシタンありと、どの時代を切り取っても興味深

い歴史が展開されていることである。学芸員の塚原博さんは「小値賀の歴史は切り口があり過ぎて、こんな多彩な歴史を持つ島はそう多くはないと思いますよ」と話してくれた。

今では珍しい活版印刷が続いている印刷所があると聞き、訪ねた。古い町並みに溶け込むようにして「晋弘舎印刷」という看板を掲げた建物があった。印刷所の中は独特のインクの匂いが充満していて、おびただしい数の活字が並んでいた。三代目の横山弘蔵さんは、「うちは創業百年。祖父が様々な事業をしていたんですが、印刷だけは文化事業だといって辞めなかったん

です」と話す。小値賀では、今でも乗船券や漁協の伝票などは活版印刷である。活字を一つ一つ組み、五十年以上使っているという印刷機にかけると、一つの芸術。この場所そのものが町の遺産だと実感した。横山さんの手の動きをじっと見ていた娘の桃子さんに話を聞くと、ゆくゆくはこの印刷所を継ぎたいのだと言う。「今、活版印刷の良さが少しずつ見直されつつあります。私は新しい活路が見出せるんじゃないかと思っています。デザインも勉強しているという桃子さんは、昔ながらの活版印刷に新たな命を吹き込もうとしている。



写真上／「晋弘舎印刷」に並んでいる活字には本真に正誤がされている。今ではもうなかなか見ることができない活字や版を見ていると「どうも懐かしい」と感じるような気持ちになる。右／「千世の園」から、このインクの匂いと印刷機の音に包まれて過ごした」といふ桃子さん。どんな4代目になるだろう。

晋弘舎印刷
小値賀町笛吹町1338-1
TEL.0959-56-2011



「小値賀町歴史民俗資料館」は戸田館に隣接する小値賀に移住し、その後小値賀の歴史を支え続けた小田家の屋敷を利用している。館内には小田家の歴史をはじめ、知られざる小値賀の歴史が詳しく展示されている。

小値賀町歴史民俗資料館
小値賀町笛吹町字木ノ下1931
TEL.0959-56-4125





人はもつと
大事にせんば



お昼ごはんに
食べんさい



島にあふれる
忘れられない
一期一会

笛 吹地区を歩いてみると、そこが路地なのか民家の庭なのか分らないほど道が入り組んでいる。迷路のような町並みには、戦前から竹の葉を見せる家があるかと思えば、突如として江戸時代の石垣が現れたり、ポンと目の前に海が開けたりする。小値賀ならではの豪奢な構えの玄関や共同井戸など、歩けば歩くほど面白いものに出会う。人の気配が感じられない民家もあった。嶋立さんは「小値賀の人たちは、家主が亡くなっても七回忌までは親戚が集まるからとか、おばあちゃんのものを見分したくないからと言って、家をそのまま残しておくんですよ」と教えてくれた。都会だったら家主のいなくなった土地は、あつという間に駐車場などに生まれ変わってしまうに違いない。路地で一人のおばあちゃんに出会った。御年九十六歳というこのご婦人は「もうすぐ百歳よ、恥ずかし」かし」と顔を隠す。そこに、フカの湯引きをぶら下げたもう一人のおばあちゃんが「お昼ごはんに食べんさい」とやって来た。ご近所同士のお二人は毎日こうして互いにご機嫌伺いをするのだという。

もうすぐ
百歳よ、
恥ずかし

ブドウば
食べに
来んね

湯引きを下げたおばあちゃんが「娘が送ってくれたブドウば食べに来んね」と家に呼んでくれた。図々しくもお邪魔すると、ジュースにブドウに柿にと、驚くほどのもてなしを受けた。おばあちゃんは八十八歳。世界中を飛び回る孫の話や佐世保大空襲の話、亡くなったご主人とのなれそめまで、次から次に話をしてくれた。そして最後に「ものは大事にせんばけど、人はもつと大事にせんば」と締めくくった。あつという間の一瞬間。見ず知らずの私たちにお土産まで持たせてくれたおばあちゃんは、「お昼も食べさせれば良かったねえ」と手を振る私たちに言葉をかけてくれた。島では出会う人はみんな、当たり前のように挨拶をしてくれる。しかも初対面の遠慮がちな挨拶ではなく、昔から知っているご近所さんのような感じである。ちよつと歩みを止めれば、挨拶はおしゃべりへと発展する。小値賀は「挨拶の島」として教科書に紹介されたことがあると聞き、大きく頷いた。この島は、まさに子どもたちのお手本である。



一日一緒に過ごすせば

涙の別れたい

島人たちと 本物の家族に なる夜

「小値賀にきたならぜひ民泊泊民家きよすみ」を訪れた。出迎えてくれたのは、山田清澄さんと妻のヨシ子さん。テーブルにはヨシ子さん手作りの郷土料理が所狭しと並んでいる。「牛肉とこんにゃく以外はすべて小値賀の食材なんです」とヨシ子さん。海の幸に山の幸、小値賀は本当に豊かな島なのだと思

感じた。「ほうぶらそうせ」という名のかぼちゃの雑炊や「いかの黒味噌和え」、ヨシ子さん自慢の「こま豆腐」に小値賀が誇るブランド魚「値賀咲」という名のイサキのお刺身など、島ならではの料理は初めての味ばかり。ヨシさんは民泊を受け入れる魅力について教えてくれた。それは「小値賀に居ながらにして、世界中

の人たちと知り合えること」。山田さん夫妻はこれまで国内の修学旅行生や観光客はもちろん、様々な国籍の人たちを受け入れてきた。「アメリカの高校生が『働くようになったらまた必ず来るから働いておいて』と写真を置いていったこともありますよ」とヨシ子さん。世界中の人たちから「ふるさとができた」「おばあちゃんにきたようだ」と

言ってもらうのが嬉しい。後日彼らから届く手紙やメールも楽しみにしている。

小値賀が現在のように注目を集めるようになったのはきっかけがある。小値賀は二〇〇七年、二〇〇八年と、二年連続で誇るべき賞を受賞している。アメリカには「ビートル・トゥ・ビーブル」という民間教育団体があり、毎年、世界の人々との交流を目的に、高校生や中学生を対象とした教育プログラムを実施している。この教育プログラムは世界各国で展開されているのだが、これに参加した学生にアンケートをとった結果、最も満足度の高かったプログラムとして世界一に選ばれたのが小値賀・平戸のプログラム。つま

り、世界中を旅した子どもたちがもう一度訪れたい場所として選んだのが、小値賀だったのである。

アメリカの子どもたちが魅了されるのも当然だと思った。民泊を申し込む際に渡される資料には次のような一文がある。「民泊民家の私たちも親戚が遊びに来たと思って受け入れております」。手間ひまかけて作ってくれた料理を味わっていたら、ヨシ子さんのことをいつの間にか「お母さん」と呼んでしまっていた。島の人が教えてくれた「小値賀はその日から親戚のような付き合いよ。二日一緒に過ごせば涙の別れたい」という言葉は本当のようだった。



民泊では郷土料理体験で、島のお母さんと一緒に料理を楽しむ。お父さんとお母さんと食卓を囲むひととき、家族になる時間である。島民が地産地消の島ではにぎやかな島民と家族の温かさに包まれる。

「民泊の申込み」
おちかアイランドツーリズム
小値賀町民会館2F内
フェリーターミナル内
TEL 0950-58-2646
おちか島民 検索
小値賀観光の総合窓口

今

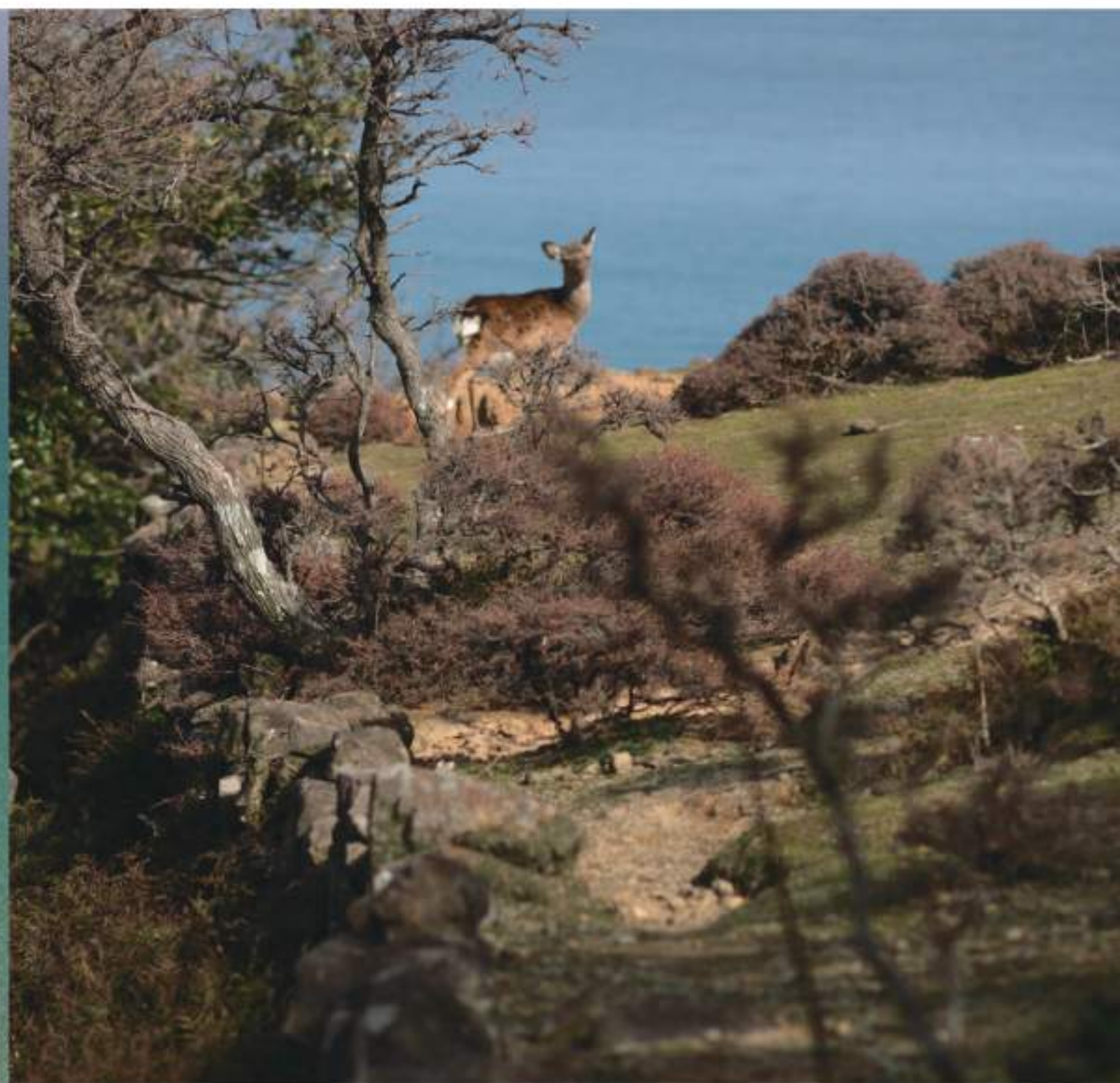
から五年前、観光客が小値賀に宿泊するといえ、それは野崎島でのキャンプを意味していた。しかし、キャンプだけでは団体客の受け入れは難しい。こうした理由から誕生したのが「民泊」だった。五年前にわずか七軒でスタートした民泊民家も現在は三十三軒。今では島の大きな魅力になっている。昨年、小値賀はまた新たな取り組みに着手した。それが一種貸切の「古民家ステイ」である。趣ある古い民家を新たに整え、贅沢な空間は、これまでとは異なる客層を取り込むことに見事に成功。今や年間の観光客は人口の約三倍である。

今年の夏は東日本大震災の被災者も受け入れた。小値賀の人々の動きは早かった。三月十一日に発生した東北地方太平洋沖地震のあと、三月末には三十代の若者五人が、東北の子どもたちを小値賀に招いて短期・中期・長期的な受け入れを行うボランティア組織「こんねおちか島」を立ち上げ、現在、そのメンバーは五十名にのぼる。小値賀の

若者が被災者支援に立ち上がった理由を「こんねおちか島」の代表を務める中村好秀さんはこう話す。「大震災が起きてすぐ、以前小値賀にホームステイしたアメリカの若者たちから『小値賀も被災したのでは?』とお見舞いの手紙とたくさんさんの義援金を送られてきたのです。そのお金を直接被災地に送るのは簡単だったのですが、そうではなく小値賀でできることはないかとみんなで話し合いました。この島の人たちは心の壁を作らない。しかも受け入れるだけではなく、昔から海外との交流を重ねてきた島がそうさせるのか、小さな島で助け合いながら生きてきた歴史がそうさせるのか、受け入れた人たちのことを自分のことのように考え、行動する。」

小値賀の人々の幸福度指数は高い。若者たちはこの島が大好きだ。出会ったお年寄りたちはみんなこう言う。「小値賀は離れとない」。そして、訪れた人たちは涙を浮かべて帰ってゆく。この小さな島は島人たちの楽園であり、世界中の人たちの心のふるさとである。

教えてもらったのは 本当の幸福



県 内の波佐見町生まれの河野直木さんが小値賀島に移住してきたのは、今から十三年前。知人から町の体育館を管理する仕事があると聞き、一度も訪れたことがなかった小値賀への移住を決めた。

小値賀は漁業と農業の町。自然体験はたくさんあったが、屋内で行う体験はなかった。そこで持ち上がったのが焼き物作り。焼き物なら室内で可能なお土産もできる。そうした流れの中、白羽の矢が立ったのが、それまで陶磁器関連の仕事をしていた河野さんだった。移住した翌年に立ち上げた「赤土研究会」で、島の赤土を使って焼き物ができないかと研究を開始。こうして小値賀焼は生まれた。

火山の噴火によって誕生した小値賀で採れるのは粘土質の赤土。赤土は焼き上がったときに三割ほど縮むため、焼き物に使用するのには難しいという。しかし納島の田んぼの土を混ぜるなど、様々な工夫を重ねることで小値賀焼は進化を遂げた。

現在、赤土研究会のメンバーは二十名。彼らの手によって日々、バラエティーに富んだ小値

賀焼が生みだされている。「小値賀焼」であることの条件は「赤土を使うこと」。ただそれだけである。「小値賀焼には、こういうものでなければならぬ」という定義はまだありません。波佐見焼や有田焼は四百年の時をかけて育まれたもの。夢は小値賀焼もそういったスタイルを作ることですが、それは私の仕事ではありません。これから小値賀焼に挑戦する人たちが長い年月をかけて作ってくれと思っています」と河野さん。「でも逆に言うと、スタイルがないからこそ自由に作れるんですよね。そこがまた楽しい」と笑った。

それまで焼き物文化がなかった小値賀に新しい風を吹き込んだ河野さん。初めての土地で新しいことを始めるのは苦労も多かったに違いない。「ぜんぜん苦労はなかったですよ。小値賀の人はとても人情味があつて、随分助けてもらいましたね」。

赤土研究会は古い幼稚園の建物で活動している。小値賀焼は小さな机や椅子が置かれた、どこか懐かしい空間で作られる。その壁には、修学旅行生たちからの嬉しい便りが一面に張りつけられていた。

二
コ
リ
ス
ト
島民特集
小値賀
Dyala
Islands

「小値賀焼」を生み出した

河野直木さん

Kouno Naoki



この島へ移住
1991年、島崎博徳氏と共
に小値賀島へ移住。翌年「赤
土研究会」を設立し、小値
賀焼を始める。現在、小値
賀町の体育館で職人として
活躍しながら、旧カトリ
ック幼稚園にて修学旅行生
などの小値賀焼体験を受け
入れている。趣味は釣り。

おまかせアイランドツアー
小値賀町観光課2791-13
ファミリーホテル内
TEL.0969-56-2846

このコーナーでは
地域を愛する人々、伝統工芸や伝統技術を大
切に守り伝えている人やまちおこしに熱いこ
とに取り組んでいる人などを紹介しています。

この島で

小値賀焼を始めたのは
運命だったと思います。



納島花生の落花生

恵みの歳時記
島人たちが待ちこがれる

わずかに
十世帯でつくる
幻のピーナッツ

小値賀島の瀬戸から島間連絡船で約七分。納島は人口三十人の小さな島である。この島に住む十二世帯のうち十世帯が栽培しているのが落花生。『納島の落花生』は小値賀本島でも手に入りにくく、幻の落花生と呼ばれている。

納島で長年落花生を栽培している山元巧さんは、「落花生づくりは今から五十年ほど前に始まったと記憶しています。私が小さい頃はおやつとして食べていたんですが、それが島外でも美味い」と評判になって、二十五、六年前から今のように大々的に作るようになったんですよ」と教えてくれた。「大々的に」といっても、その量は決して多く

はない。なにせ十世帯である。九月に収穫した落花生は乾燥機、専用の脱穀機にかけ、さらに十日以上乾燥。殻をむき、選別して釜で炒る。すべて手作業のため手間がかかる上に、農作の時でも商品になるのは収穫した量の約七割だ。

落花生は各家庭で炒り方や塩加減が異なり、微妙に味が違うという。妻の延代さんは「納島に嫁いで三十年になりますが、今でも釜から上げるタイミングは迷いますね」と話す。こうした昔ながらの作り方はもちろんのこと、納島の落花生が美味しいのには理由がある。「小値賀町の中でも納島の土は特に農作物の栽培に向いているように、

この島で作った作物は、なぜかでんぶん質が高いんです」と巧さん。納島の落花生が販売される期間は毎年十月中旬から五月末頃にかけて。生産量が少ないため、小値賀島や平戸の一部でしか販売しておらず、しかも店頭には並ぶとすぐに完売してしまうという。納島の人たちは多くの人に食べてほしいと話す。残念ながらこの島でも後継者不足で今後生産量は減少の一途をたどることが予想される。

味は、落花生の生産日本一を誇る千葉県産に勝るとも劣らないと言われる。この島の落花生はとにかく香ばしい。一つ、また一つとやめられない美味しさだ。一袋二百グラム五百円の島の宝である。

【ピーナッツの殻はひとつひとつ手作業でむかれる。力も使えない作業だ。落花生農家の山元さんご夫妻。最後の産しき「やっばり天婦羅」ですね。何年作ってもおいしいもんです」とご主人。納島の落花生は香ばしさが際立っていて、とても美味しい。農家の心遣いを感じる。納島の港では島のシンボルともいえる大きなあかしの樹が迎えてくれる。おむすび屋「おむすび」TEL.0910-56-2640



読者アンケート

本誌に対する皆さんの率直なご意見やご感想をお寄せください。柱読で、魅力的な商品をお送りします。

締切: 1月4日(水) ※消印有効

応募方法

アンケートの回答、希望のプレゼント名、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を必ず記入し、ハガキまたは簡易電子申請システムで応募。※お一人につき、1応募まで。

ハガキ

〒850-8570 (住所不要)
長崎県佐賀県「ながさきにこり」係

簡易電子申請システム

パソコン WEBで

長崎県 簡易電子申請 検索



アンケート 携帯QRコード

- 本誌をどこで手に入れましたか。
(例) 定期購読、発行、観光窓口、空港、WEBなど
- 本誌の魅力が伝わりましたか。
①よく伝わった
②まあまあ伝わった
③どちらともいえない
④あまり伝わらなかった
⑤伝わらなかった
- その理由やご意見などを教えてください。
- 冊子版の定期購読(無料)を希望しますか。
①希望する ②希望しない(定期購読中を含む)

プレゼント商品

A 古民家スタイ 「日月庵」宿泊券

(1泊2食付き、2名様)2組

港に面した高台にある平屋で最大2名までの1棟貸し切りの宿。古民家の古き美しさはそのまに、バスルームや床暖房など設備も充実。お食事は、「豊松」の島の恵みをみんなに届けた創作和食料理です。



B おちか手ぬ・レターセット

10名様

長崎市の産物産「たてまつる」とのコラボ商品である小値賀オリジナル手ぬぐいと、島のマスコット「ちかまる」が描かれた、島のお母さん手作りのレターセット。



C カツオの生節(2本)

15名様

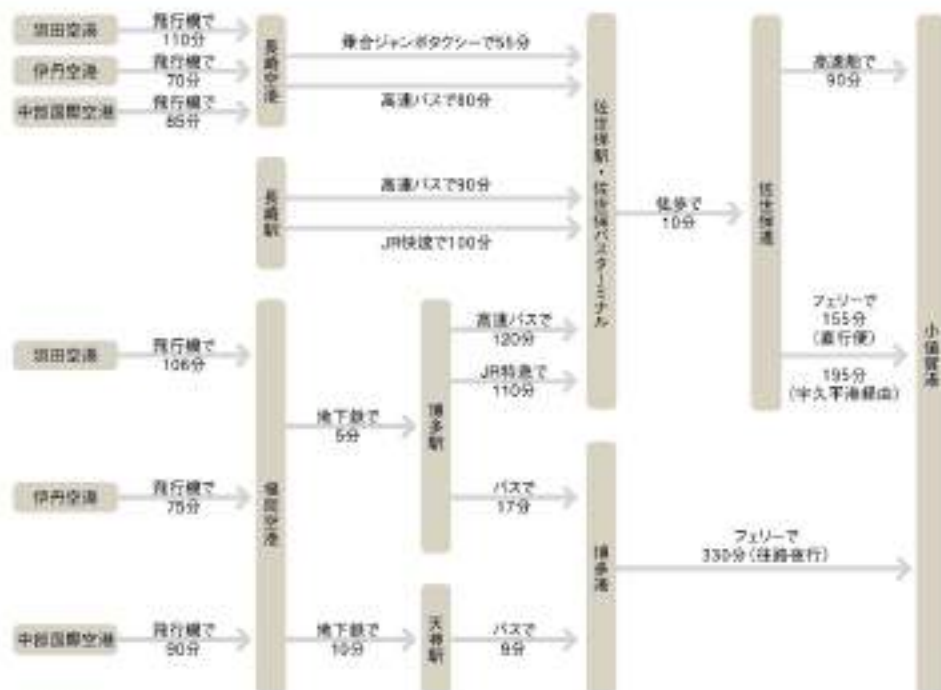
五島近海で獲れた「ハガツオ」を1本1本手作業で三枚におろし、焼付けは一切せず茹で上げて、桜や松木などを使って焼製にしました。おつまみやまぜご飯の具材などにどうぞ。



当選ノ1月中旬抽選・商品発送予定。当選は、商品の発送をもって代えさせていただきます。



小値賀へのアクセス



※詳しくはお問い合わせください(おがきアイランドツーリズム TEL.0950-56-2646)

語りかける風景

4



島の朝市

島の朝市にはレジがない。生産者が持ち寄るコンテナの中に、それぞれ貯金箱のような空き瓶が置かれていて、客はその中にお金を入れる。どの野菜も基本は百円。「このかぼちやばうまかたるね。チャリン。」「こりや、初もんたい」チャリン。おばあちゃんたちの会話の合間に、百円玉を入れる音が響き渡る。

店内には「買ったなら 手もとでたしかめ 金入れて」「これからも直売所をこひいきに」と標語のようなものが貼ってある。中にはこんなものも。「お客さん コインはだめです 気をつけて」。お金とコインを間違えて入れる人がいるのだろうか。張り紙の横にはビニール袋が吊り下げられていて、中にはゲームセンターで使うようなメダルが入っていた。

両手いっぱい野菜を入れた袋を下げたおばあちゃん、トラクタばらうて家まで運んでくれね」とみんなを笑わせる。小さいながらも賑やかな島の朝。気付いたら、お天道様がのぼっていた。



チャリンチャリン。
朝市に響く音色が
一日の始まりを告げる

EVENTS

11月～3月のイルミネーション情報

寒さも一段と厳しさを増してくるこの季節。
心温まる長崎のイルミネーション特集をお届けします。
クリスマスや週末にぜひ、お出かけください。

第16回 きらきらフェスティバルin佐世保

島公園を中心に、商店街の公園や街路、アーケード街がイルミネーションに彩られます。人工雪を降らせる「クリスマスの佐世保に雪が降る」など楽しいイベントも満載。



期 間／～12月25日(日)
会 場／佐世保市(島公園・佐世保公園他)
お問合せ先／TEL.0956-24-4411(きらきらフェスティバル実行委員会)

ハウステンボス光の王国

Yahoo!JAPANのクリスマス特集2010「人気イルミベスト20」で全国第1位に輝いた「光の王国」。世界一の820万球にバージョンアップし、この冬オープン白い観覧車が夜には「光の観覧車」に変わります。



⑤ハウステンボス/14160

期 間／～平成24年3月4日(日)
会 場／ハウステンボス(佐世保市)
お問合せ先／TEL.0570-084-110(ハウステンボス総合案内ナビダイヤル)

長崎ハートフル・イルミネーション

出島から大浦天主堂～グラバー園までの旧居留地エリアが、イルミネーションやオブジェで彩られます。地元ガイドが案内する「イルミネーションさくら」も開催。



期 間／11月25日(金)～12月25日(日)
会 場／長崎市街地一帯(出島・長崎水辺の森公園周辺ほか)
お問合せ先／TEL.095-829-1314(長崎市長崎さくら観光課)

島原ウインターナイト・ファンタジア

巨大ツリーやイルミネーション動物園、ロマンティックアーチなど、ファミリーにも恋人同士にもおすすめ。クリスマスイベントにはサンタがプレゼントを持ってやってきます。



期 間／12月1日(木・点灯18:00～)～平成24年1月7日(土)
会 場／島原外港緑地公園(島原市)
お問合せ先／TEL.0957-63-1111(島原ウインターナイトファンタジア実施委員会)

チャーチウィーク in 上五島教会コンサート

世界遺産候補の青い洞窟天主堂など、ライトアップされた美しい教会でプロのクラシック音楽家が奏でる一足早い上五島のクリスマス。イルミネーションは1月初旬まで点灯しています。



期 間／12月6日(火)～11日(日)
会 場／新上五島町内の6教会
お問合せ先／TEL.0959-42-3851(新上五島町観光物産課)

グラバー園ウインターフェスティバル2011

洋館や庭園のライトアップやキャンドルに願いを書いて火を灯す「ハートキャンドルイベント」、コンサートなど多彩なイベントが満載。閉園時間も21時まで延長されます。



期 間／12月23日(金・祝)～12月25日(日)
会 場／グラバー園(長崎市)
お問合せ先／TEL.095-822-8223(グラバー園)

県内のイベント情報は、「ながさき旅ネット」でご覧いただけます。

<http://www.nagasaki-tabinet.com/>

又は [ながさき旅ネット](#) 検索

TOPICS

トピックス

日中友好交流の新たなスタート ～中国湖北省と友好交流関係の同意書締結～上海航路復活へ～



友好交流関係の同意書に調印する知事と王國生省長



長崎港から出航するオーシャンローズ

辛亥革命100周年を記念して中国湖北省・武漢市に新設された「辛亥革命博物館」及び「中山蔵博物館」に長崎県コーナーが設置されました。中村知事は辛亥革命博物館の長崎県コーナーの開会式(10月11日)出席のため訪中し、10日には湖北省の王國生省長と会談するとともに、長崎県と同省との友好交流関係に関する同意書を締結しました。

また11月3日には、待望の「長崎～上海航路【船名:

オーシャンローズ】」が復活し、長崎港から第1便が就航しました。長崎と上海を片道24時間程度で結び、来年からは本格運航が予定されています。辛亥革命を主導した孫文と彼を物心両面で支えた長崎県出身の実業家・梅屋庄吉の友情をきっかけに始まった湖北省との交流や上海航路の復活は、今後さらなる日中交流促進の起爆剤として大きな期待が寄せられています。

「長崎～上海航路」についてのお問合せ先／県の政策企画課 TEL.095-895-2034

県勢躍進!! 3年後につなぐ ～山口国体～

第66回国民体育大会(山口国体)が10月11日に終了し、県勢は剣道少年女子、ソフトボール少年男子など5競技7種目で優勝、計19競技73種目で入賞を果たしました。総合順位は15位となり、昨年の31位から大きく躍進しました。この順位は1969年長崎国体の総合優勝、1970年岩手国体の13位に次ぐ好成績です。3年後の長崎がんばらんば国体での総合優勝の目標に向けて、大いに弾みがつく結果となりました。



【ソフトボール少年男子決勝、沖縄～長崎】優勝を決め、チームメイトに肩上げられるエース中坂(大村工業)

©「2014長崎がんばらんば国体」のホームページはこちらから [2014長崎国体](#) [検索](#)